№J2117

パキスタン市民社会の歴史的起源を解明した、博論『近代ムスリム市民社会の成立と「女性問題」－英領パンジャーブにおけるイスラーム擁護協会の事例から－』の刊行

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科　特任助教
水澤　純人

本活動は 2021 年度出版助成を受けて、『「近代ムスリム市民社会」の誕生―イスラーム擁護協会の「女性問題」から考える』（晃洋書房、2023 年）を刊行した。

本書は、採択者の博士学位論文（2020 年）を大幅に加筆・修正して、新たな史料の読解をもとに「近代ムスリム市民社会」における女性の台頭をより実証的に明らかにしたものである。2016－17 年度・りそなアジア・オセアニア財団の調査研究助成をもとに収集した史料は、同論文も含めた諸成果に活かされている。

本書はパキスタン市民社会の起源解明を通じて、独立後の民主化を支える歴史的径路を立証することを目的とした。具体的には、英領インドのパンジャーブ地域においてイスラーム教徒（ムスリム）が宗教コミュニティとして団結し、植民地期の政治・社会状況に適応するためにコミュニティの規範を再解釈し、女子教育を始めとした「女性問題」に取り組んでいった経緯について、独立運動への女性参加という政治的帰結を踏まえて論じた。

本書の刊行には 3 点の意義がある。第一に、個人とコミュニティの二項対立を前提としてきた非西洋諸国の市民社会論に対して、女性が「個人」として台頭していった政治的契機を捉えることで、両者を架橋する新たな視点を提示したことである。次に、アンジュマンと呼ばれるムスリム結社の機関誌を丹念に読み解くことで、「周縁的」な行為主体（宗教マイノリティかつ女性）の視点から南アジアの近代史を捉えなおしたことである。最後に、他者への寛容や共生に果たす宗教の役割を明らかにしたことにより、民主的な社会実現に向けたムスリム市民社会の可能性を提起したことである。

本書は、国内外の先行研究が論じてこなかったムスリム結社に関して、学際的かつ現代的課題に応えるようにその活動を検証した点において、学界内外に広く影響を与えることが示唆される。今後はパキスタンを始めとした国外への成果発信のためにその一部を英語論文として刊行し、他地域・時代との比較も含めた共同研究へと発展していくことが期待される。